様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５００５５３
研究課題名（和文）　クーベルタン・オリンピズムの日本的解釈の源流

研究課題名（英文）　The origin of the Japanese interpretation of Coubertin Olympism

研究代表者
和田　浩一（WADA　KOICHI）
神戸松蔭女子学院大学・文学部・准教授
研究者番号：２０３０９４３８

研究成果の概要（和文）：　本研究は、西洋中心の文明史観から生まれたオリンピズムの日本的な解釈を、その源流に焦点を当てて論じる。主な成果として、1）オリンピズムの日本的受容を書誌学的に整理したこと、2）ピエール・ド・クーベルタンの日本に関する言説のオリンピズムへの影響について検討したこと、3）IOC 委員として嘉納治五郎をクーベルタンに推薦したオーギュスト・ジェラールのオリンピズム理解について考察したこと、が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：　This study discusses the origin of the Japanese interpretation of Pierre de Coubertin's Olympism, which derived from ancient notions in European civilization. Mainly in this study we 1) summarize the reception of Olympism in Japan from the bibliographical point of view, 2) investigate the influence of Coubertin's description relevant to Japan on his Olympism, and 3) consider the understanding of Olympism by Auguste Gérard, who recommended Kano Jigoro to Coubertin as an IOC member.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	900,000	270,000	1,170,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学
キーワード：ピエール・ド・クーベルタン、オリンピズム、オリンピック・コングレス、オーギュスト・ジェラール、嘉納治五郎

１．研究開始当初の背景

グローバリズムの政治的・経済的・文化的諸問題が、多様な観点から論じられるようになってきたが、西欧中心主義に基づくスポーツ文化を国際的に展開させてきたオリンピズムへの批判は、その必要性が指摘され始め

たばかりである。
　オリンピズムの批判的研究は国際オリンピック・アカデミー、各国内オリンピック・アカデミー、国際ピエール・ド・クーベルタン委員会によって進められているが、いずれも西欧的な視点を脱し切れていない。
　2008 年の北京大会で夏・冬合わせて４回目のオリンピック大会を開くアジアは、西欧的なオリンピズムを批判できる資質をもち合わせている。しかし、中国・韓国では未だオリンピックを批判する土壌が育っておらず、日本からの主な批判も政治・経済の問題に焦点を当てたものとなっている。
　近代オリンピックの創設者ピエール・ド・クーベルタン（1863-1937）が名付けたオリンピズムという思想は、近代オリンピックの意義が問われるたびに取り上げられる現代的な関心事項の一つである。21 世紀に入った今、異なる性、異なる文明、異なる地域を包み込む新しいオリンピズムの方向性を議論するには、非西欧的な視点、とりわけアジア圏で初めてオリンピックに参加した日本のオリンピズム解釈に焦点を当てた研究が急務であると考える。

２．研究の目的
　この研究の目的は、地理的にも文化的にも西欧から離れていた日本が、西欧中心の文明史観から生まれたオリンピックの思想をどのように解釈していったのかを、その源流に焦点を当てて明らかにすることである。具体的には、以下の三つの課題を設定する。

(1) 明治期オリンピック関連文献の分析
　「オリンピック」という言葉と「オリンピズム」という思想が、どのような形で日本に受容されていったのかを書誌学的に整理し、オリンピズムの日本的解釈の思潮を明らかにする。

(2) クーベルタンの日本に関する言説の抽出とそのオリンピズムへの影響
　嘉納治五郎（1860-1938）は 1909 年にアジア初の IOC 委員に就任するが、これには IOC 会長クーベルタンの日本への眼差しが不可欠だったはずである。1909 年以前に発せられた日本に関するクーベルタンの言説を整理し、日本におけるオリンピズム受容史の前史を描く。

(3) 駐日仏大使ジェラールのオリンピズム理解
　クーベルタンに IOC 委員として嘉納を推薦したオーギュスト・ジェラール（1852 - 1922）は、オリンピズムを理解していたフランス人外交官だったという仮説を検証する。この作業により、オリンピズムの日本的解釈に影響を与えた人物としてのジェラールの再評価を試みる。合わせて、ジェラールに嘉納を推薦したと思われる駐露大使本野一郎について、基礎的な調査を進める。

３．研究の方法
　本研究は歴史研究であり、前述の目的を達成するためには、明治期に記された一次史料を新たに発掘・収集・分析することが不可欠となる。各目的に対応する新史料は以下の通りである。

(1) 明治期日本のオリンピック関連文献
　日本語文献およびこれらの元となったオリジナル文献を突きとめる作業に加え、これまでの研究では対象としてこなかった歴史書および英和辞典におけるオリンピック関連記述を収集・分析する。

(2) クーベルタンの著書・雑誌記事
　クーベルタンの代表的な文献は、*Pierre de Coubertin : Textes Choisis*（『クーベルタン著作選集』1986 年）に収録されている。しかし、*Bibliographie des oeuvres de Pierre de Coubertin*（『クーベルタン文献目録』1991 年）によれば、明治期に限っても、収録されていない雑誌記事は 200 編を大きく上回っている状況にある。

(3) ジェラール＝クーベルタン書簡、ジェラールの日記・回想録ほか
　ジェラールがクーベルタンの知人であったこと以上の情報は、先行研究には見あたらない。したがって、日本を代表する IOC 委員の適任者を推薦し得たジェラールのオリンピズム理解を議論するには、彼の日記や回想録、クーベルタンとの往復書簡といった一次史料の発掘が不可欠の作業となる。合わせて、本野一郎の経歴・著書等の基本的な情報を整理する。

　なお、史料収集は以下の図書館・史料館等で実施した。
国内図書館
　筑波大学、神戸大学、金沢大学、花園大学、聖トマス大学、国立国会図書館、神戸市立図書館、芦屋市立図書館
国外諸機関
　フランス国立図書館、フランス外務省史料館、フランス古文書館、ベルギー王立図書館、ゲント大学図書館／史料室（ベルギー）、オリンピック博物館（スイス）、マインツ大学オリンピック研究室（ドイツ）、コブレンツ大学オリンピック研究室（ドイツ）
その他

クーベルタンの末裔マリ＝クリスティーヌ・ド・ナヴァセル氏、イヴォン・ド・ナヴァセル氏へのインタビュー（フランス）

４．研究成果

以下のように、地理的にも文化的にもオリンピックと離れていた日本によるオリンピズム解釈の事実とその経緯が明らかとなり、従来の欧米中心のオリンピック史をアジア的視点から加筆・修正することの必要性を提示できた。

(1) 明治期オリンピック関連文献の分析

① オリンピック・オリンピズム受容の書誌学的整理

先行研究を参考にして収集したオリンピック関連記述の内容は、ほぼ時系列に沿った形で次のように整理できる。1）歴史書（ギリシャ史・西洋史）・体育概論書を通して紹介された古代オリンピックに関する断片的な知識、2）雑誌記事における古代オリンピックに関する体系的な知識、3）新聞、少年雑誌、一般雑誌における近代オリンピック競技会の報告、4）少年雑誌、体育雑誌におけるクーベルタンの教育理念（オリンピズム）の紹介、5）体育雑誌におけるアテネ中間大会（1906 年）招待状の紹介、6）文学雑誌におけるオリンピック運動の日本的な解釈。このように、教育・体育・文学のある限られた領域ではあったが、日本のオリンピズム解釈は、翻訳による断片的知識の吸収からオリンピック理念の日本的な解釈にまで段階的に進んでいった。

個別の文献で特に注目できるのは、以下の4 点である。1）総合時事雑誌の『世界之日本』（1897 年）において、第１回アテネ大会を報告したクーベルタンの雑誌記事（*Century,* 1896）が抄訳されていたこと、2）人物批評の第一人者鳥谷部春汀（1865-1908）が『中学世界』（1903 年）の中で、クーベルタンの教育思想を取り上げた *Fortnightly Review* の記事（1903 年）を翻訳・紹介し、オリンピック大会を青少年に活力を与える教育的なイベントであると解釈していたこと、3）『読売新聞』（1905 年）にオリンピック関連記事を投稿した谷本梨庵は、1900 年から 3 年間ヨーロッパに留学した東京高等師範学校教授の谷本富（1867-1946）であったこと、4）小説家の押川春浪（1876-1914）が『冒険世界』（1908 年）誌上で、東洋オリンピック開催の可能性に言及したこと、である。

② 歴史書に見られるオリンピック関連記述の分析

「外国文化関係文献年表」（1968 年）、『日本西洋史学発達史』（1969 年）および各種図書検索システムによれば、幕末から 1896 年（第１回近代オリンピック大会）にかけて出版された西洋史・ギリシャ史を含む歴史書は 118 冊ある。確認できた 104 冊のうち、オリンピック関連記述があったものは 67 冊であり、これらは全体として、1）四大祭典、2）祭典名、3）競技種目、4）賞、5）文芸との融合、6）年期、7）その他、に関する内容を扱っていた。

日本のジャーナリズムにおける用語「オリンピック」の初出は、運動会について報じた 1887（明治 20）年の『読売新聞』の記事であり、この中に、古代オリンピックの優勝者には「冠」が与えられたという記述がある。体操伝習所教授ジョージ・アダムス・リーランド（1850-1924）による体育史講義を記した『体育論』（1883 年）や『体操原理』（1887 年）にはこのような記述はなく、『読売新聞』の記事は明らかに、『希臘史略』（1872 年）または『希臘史』（1876 年）から得た知識を用いて記されていることが分かった。

③ 英和辞典に見られるオリンピック関連用語の分析

幕末から 1896 年の間に出版された計 43 冊の英和辞典について、オリンピック関連用語の有無を調べ、それらの記述内容を分析した。この結果、1）幕末から 1896 年にかけて、オリンピック用語を掲載した英和辞典は 30 冊に上ること、2）各辞典にほぼ共通する歴史・天文用語（Olympiad）、地理用語（Olympian, Olympic）の他に、競技会に関する概略的記述を含む体育用語（Olympic(s) games）を掲載している辞典が一部存在していたこと、が明らかになった。

(2) クーベルタンの日本に関する言説の抽出とそのオリンピズムへの影響

クーベルタンの日本への眼差しとして注目できる事実は 3 点ある。

一つ目は、柔術（フランスでは第二次世界大戦後まで、柔術・柔道の総称として“jiu-jitsu”を使用していた。）に大きな興味を示し、これを自著『20 世紀の青年教育：体育』（1905 年）で提示したカリキュラムに取り入れていたことである。これはオリンピズムの中に、日本の身体運動文化が内包されていたという意味で重要である。クーベルタンは 1904 年 11 月 11 日にはすでに、アメリカ大統領テオドア・ルーズベルト（1858-1919）への書簡（Durry, *Coubertin：autographe,* 2003）の中で、柔術に対する高い関心を示している。また、IOC の定期刊行物 *Revue Olympique* 誌上で 1906 年 1 月には「柔術について」を、1912 年 1、2 月には「柔道」を発表している。フランスで柔術への関心が高まるのは 1905 年秋以降のことであり

（Brousse, *Les origines du judo en France de la fin du XIXe siècle aux années 1950,* 2000）、クーベルタンの柔術・柔道への注目はこれよりも早く、しかも一過性のものではなかった。

二つ目は、オリンピック・コングレス（1905年、ブリュッセル）への招待状が、駐日ベルギー公使を通じ、IOC 委員のいない当時の日本に送られていたことである。この招待状は、クーベルタンの指示により文部省を設置していた国々に送られたものであり、彼が特に日本に注目していたわけではない。しかし結果的に、新しいオリンピズムを作り出す大切な活動として位置づけられていたオリンピック・コングレス（*Revue Olympique,* 1913）への招待状が、オリンピックに参加していなかった日本に届いていたことは、従来のオリンピック史に加筆・修正を要請する重要な歴史的事実だと言える。

三つ目は、駐日大使就任が決まった〈直後〉に送った 1906 年 10 月 14 日付ジェラールへの書簡（Archives Nationales de France）である。クーベルタンはこの書簡の中で駐日大使への就任を祝福するとともに、「IOC およびその会長に対する好意あふれるご支援に、改めて感謝申し上げます」と、IOC 会長としての立場を強調している。以上の事実から、クーベルタンはオリンピック・コングレス（1905 年）の協力者ジェラールに、後日 IOC 日本委員の選出を依頼しようとしたのだと考えたい。

最後に、「クーベルタン」「日本」関係の史料について述べておきたい。

本研究では *Indépendance Belge*（1899-1906）と *Revue de Pays de Caux*（1902-1903）の記事（各 34、51 編）を新たに入手して分析したが、日本について言及しているまとまった記述はなかった。また、クーベルタンの末裔であるマリ＝クリスティーヌ・ド・ナヴァセル氏、イヴォン・ド・ナヴァセル氏にインタビューしたが（2009 年 1 月 9 日）、クーベルタンの日本観を検討し得る史料は、彼が当時の招致委員会に宛てた東京大会（1940 年）の決定を祝福する書簡（1937 年）だけであり、他のプライベートな史料等は存在しないとの証言を得た。

（3）駐日仏大使ジェラールのオリンピズム理解

第 1 回大会（1896 年）直後から 1910 年頃にかけて、IOC 内部には、近代オリンピックのアテネ恒久開催を主張するギリシャによる各国委員への働きかけ、競技場におけるナショナリズムの高揚、政情不安によって委員間に生じた政治的・外交的・民族的な問題といった大きな混乱が生じていた。したがって、オリンピズムの理解者でありかつ IOC の事業に対して国際協調の視点から協力してくれる新しい委員を捜すことが、クーベルタンの急務となっていた。和魂洋才の態度で体育を中心に据えた教育改革に取り組んでいた嘉納は、まさにクーベルタンが理想とした IOC 委員だったと言える。

クーベルタンと嘉納を仲介したのは、駐日大使ジェラールだった。従来、ジェラールはクーベルタンの単なる友人・同窓と記されるのみで、彼がなぜ日本を代表する理想的な IOC 委員を推薦し得たのかについては議論されてこなかった。本研究では、新たに入手したジェラール＝クーベルタン書簡 7 通やジェラールの日記、オリンピック・コングレス（1905 年）資料などによって、彼がオリンピズムを理解していたフランス人外交官だったことを説明する有力な事実を確認できた。

一つ目の事実は、当時駐ベルギー公使だったジェラールがブリュッセルで開かれたオリンピック・コングレス（1905 年）に協力する中で、オリンピズムが教育学的なコンセプトであることを直接理解したことである。「体育」をテーマにしたこのコングレスの注目点は、オリンピック功労賞が新たに設けられ、初代受賞者に身体的、知的、道徳的完成の模範を示したとしてアメリカ大統領ルーズベルトが選ばれたことである。クーベルタンはオリンピック功労賞の表彰を通して、IOC がオリンピック大会の単なる運営組織ではなく、教育改革運動という使命を帯びた団体であることを強調したのだった。ジェラールは後日、クーベルタンとの連名でフランス政府に、コングレスの主催者で後に IOC 会長となるアンリ・ド・バイエ＝ラツール（1876 - 1942）を教育功労勲章（オフィシエ）に推薦した。コングレス最終日前日の晩餐会において、ジェラールはクーベルタンの右隣に座っており（CIO, *Congrès International de Sport et d'Education physique,* 1905）、オリンピズムの教育的な意味について直接説明を受けたものと考えたい。

二つ目の事実は、“right-man（打ってつけの人物）”という英語表記で強調しながら、クーベルタンがジェラールに日本を代表する IOC 委員の推薦を依頼したことである（ジェラールのクーベルタン宛書簡 : 1909 年 1 月 19 日付、Archives du CIO）。実はクーベルタンは、1900 年のパリ万博関連の国際体育会議の副委員長であり、その会議に出席した山根正次（1857-1925）と彼の所属団体である日本体育会の存在を知っていた。それにもかかわらず、IOC 日本委員の推薦を山根や日本体育会ではなく駐日仏大使に依頼したところに、クーベルタンがジェラールのオリンピズム理解に全幅の信頼を置いていた形跡がうかがえる。

ジェラールに嘉納を推薦した駐ロシア大

使本野一郎については、ジェラールが本野を信頼できる日本人として評価していたこと、ならびに 1908 年 11 月 15 日に東京の本野家で開かれた「ガーデン・パーティー」で顔を合わせていたこと（Gérard, Mémoires d'Auguste Gérard, 1928）以外に、重要な事実にたどり着くことはできなかった。

なお、当初の目的には掲げなかったが、ジェラールから打診された IOC 委員への就任をなぜ嘉納が即決し得たのかを、彼とクーベルタンの教育的な業績との比較により検討した。ジェラールの仲介を経て出会うまで嘉納とクーベルタンとの間には何の接点もなかったが、両者に共通する思想・行動原理として、1）功利主義思想、2）教育制度の比較研究、3）三育思想に基づく教育論、4）体育・スポーツの奨励、5）国際協調への志向、があったことを確認した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

1. 和田浩一「嘉納治五郎のピエール・ド・クーベルタン宛書簡（1）：嘉納のＩＯＣ委員就任から第一次世界大戦まで」『講道館柔道科学研究会紀要』12: 17-28、2009、査読無

〔学会発表〕（計５件）

1. 和田浩一「オーギュスト・ジェラールのオリンピズム理解」スポーツ史学会第 23 回大会、2009 年 11 月 29 日、名古屋工業大学
2. 和田浩一「オリンピックの用語史：1896 年以前に出版された英和辞典に注目して」日本体育学会第 60 回記念大会、2009 年 8 月 27 日、広島大学
3. 和田浩一「明治前期歴史書に見るオリンピック」日本体育学会第 59 回大会、2008 年 9 月 10 日、早稲田大学
4. 和田浩一「クーベルタンから見た嘉納治五郎」（日本体育学会の本部企画シンポジウム「嘉納治五郎と日本の体育・スポーツ」）日本体育学会第 58 回大会、2007 年 9 月 6 日、神戸大学
5. 和田浩一「近代オリンピック以前に日本で出版されたギリシャ史文献に見るオリンピック――東北アジアにおけるオリンピック運動の源流を求めて――」第 7 回東北アジア体育・スポーツ史学会、2007 年 8 月 21 日、忠南大学校（韓国）

〔図書〕（計４件）

1. 一般財団法人嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター編『社会の中におけるスポーツの価値に関する調査報告書』一般財団法人嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター、2010 年、115p.（和田浩一「嘉納から見たクーベルタンのオリンピズム」、pp. 27-43.）
2. 真田久編『嘉納治五郎のオリンピック理念の現代的な展開に関する研究』国立大学法人筑波大学、2009 年、62p.（和田浩一「クーベルタンと嘉納」、pp. 11-15.）
3. 日本オリンピックアカデミー編『ポケット版オリンピック事典』楽、2008 年、279p.（和田浩一「近代オリンピックの創始者クーベルタン」「クーベルタンのことば」「日本とオリンピックとのかかわり」、pp. 16-17, 105-106.）
4. Niehaus, Andreas; Seinsch, Max (ed.). Olympic Japan - Ideals and Realities of (Inter)Nationalism. Würzburg: Ergon Verlag, 2007, 211p. (Wada, Koichi. "First Contact: Olympic ideas and ideals in Meiji Japan until 1909," pp. 17-32.)

〔その他〕
ホームページ等
http://ksw.shoin.ac.jp/~wadaco/contenu/etudes.html

６．研究組織
(1)研究代表者

和田　浩一（WADA KOICHI）
神戸松蔭女子学院大学・文学部・准教授
研究者番号：２０３０９４３８

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし